



“地域の幸福”を支え続けた『小原哲学』のふるさと、大崎から。

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA(原風景)を訪ねる『大崎今昔物語』。その第十七話は、大崎の地域経済を支える「城南信用金庫」の牽引者、小原 鐵五郎が果たした地域の繁栄と“幸福実現”への取り組み。貧富の差のない安定した社会と地域経済発展のため、信用金庫の公共的使命の達成へ生涯を捧げた小原 鐵五郎の歩みを辿ります。

信用金庫が目指した、大崎の人々の元気な暮らし。城南信金発足間もない昭和30年代の百反坂にて



国会で独自の金融哲学を提言する小原鐵五郎。中小企業の保護育成を唱え、信用金庫の株式会社化を進める大蔵省へ真っ向から反対意見を述べるなど、信金の理念を貫く姿勢は、やがて時の政府をも動かすことに



投機的金融を排した小原哲学は、鐵五郎の名をもじって「小原鐵学」とも呼ばれた



発足当時の城南信用金庫本店



大崎町役場の一室にあった大崎信用組合

小原 鐵五郎と城南信用金庫の歩み

- 明治32年 東京府荏原郡大崎村字居木橋(現品川区大崎三丁目)の農家小原兼治郎・りんの四男(七人兄弟の五番目)として生まれる
- 大正4年 日野尋常高等小学校卒業
- 8年 大崎信用組合設立に参加
- 昭和20年 大崎信用組合専務理事に選任される
城南信用組合発足。専務理事に就任
- 26年 城南信用金庫発足、引き続き専務理事
- 31年 城南信用金庫理事長に就任
- 38年 全信連第三代会長に就任
- 41年 全信協第八代会長に就任
- 45年 城南信用金庫本店新築
- 50年 城南信用金庫会長に就任
- 52年 勲二等瑞宝章受章
- 62年 全信協名誉会長に就任
勲一等瑞宝章受章
- 平成3年 我が国初の独自のプライムレートを導入
- 平成4年 我が国初の不良債権のディスクロージャーを実施
- 平成6年 我が国初の懸賞金付き定期預金「スーパードリーム」取り扱い開始、金融界の横並びに風穴を空け、内外から高い評価を受ける



地元の人々の暮らしを支える地域金融機関の城南信用金庫では、地域社会の一員として、これまで地元の祭りや行事、講演会、清掃奉仕など、様々な地域活動の主催、支援を行ってきました。「小原哲学の復活」を基本方針に、地域を守り、地域の人々を幸せにする社会貢献企業を目指す「城南信金」のこうした取り組みに、いま、大きな期待が寄せられています。

城南信用金庫の第三代理事長として、地元の暮らしと中小企業の発展に尽力した小原鐵五郎。「貸すも親切、貸さぬも親切」の名言をはじめ、中小企業の広大な裾野の上にこそ大企業の頂があると語る「裾野金融」など、「小原哲学」とも呼ばれた信用金庫の経営理念を打ち立てた昭和の偉人の志は、ここ大崎の地から育まれたのでした。

大崎に誕生、「大崎信用組合」で育った「小原ストーリー」。「ミスター信用金庫」とも「昭和の意見番」とも呼ばれた偉人、小原鐵五郎は、明治32年、荏原郡大崎村字居木橋(現品川区大崎三丁目)の農家の四男として誕生。地元の日野尋常高等小学校を卒業後、大正8年に設立間もない「大崎信用組合」に書記として採用されます。その前年には富山県で「米騒動」が勃発、貧困に苦しむ人々を見て貧富の差のない安定した社会を築きたい、との一念からの入職でした。その当時の大崎(居木橋周辺)は、まだ田んぼの中に40戸程の農家があるだけの寒村。ここから後に日本の金融界を牽引するリーダーの一人が育つとは、誰もが予想できない時代でした。

城南信用金庫の歩みと共にあった「小原哲学」昭和20年になって、大崎信用組合をはじめとする城南地域の15の信用組合が合併、「城南信用組合」としての歩みがスタートします。小原鐵五郎はこのとき専務理事に就任。さらに終戦間もない昭和26年には、戦後乱立した「儲け主義の金融機関」とは一線を画することを旨とし、「地域の中小企業と国民生活の繁栄を支えることを使命とする公共的金融機関」として「城南信用金庫」が発足します。その後、昭和31年に城南信用金庫理事長に就任した小原 鐵五郎は、信用金庫のこの経営理念を掲げ、バブルの時代になっても不健全な投機的融資を禁じた「貸すも親切、貸さぬも親切」の鉄則を貫くなど、利に走ることなく地域の人々の為になる金融機関としての務めに徹したのでした。その後、全国信用金庫協会名誉会長就任と同時に勲一等瑞宝章を授章。金融界のリーダーシップパーソンとしてのその生涯は、ここ大崎の発展を支える地域金融機関の歩みと共にありました。



小原 鐵五郎



城南信用金庫本店全景(昭和60年)



明るく親しみやすい窓口業務を目指した、昭和60年頃の本店ロビー